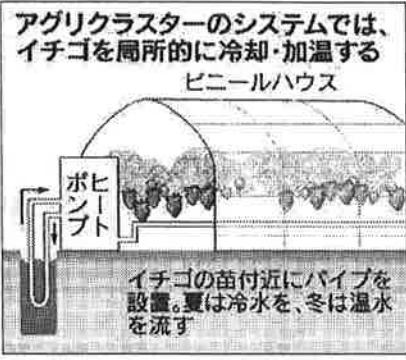


アグリクラスターが空調システム

イチゴ、品薄の夏も収穫



アグリクラスター(さいたま市)は、栃木県のイチゴ農家向けに地中熱を活用した空調システムを売り込む。ビニールハウスの土壌にパイプを巡らせて苗を冷やすことで品薄な夏場にも新鮮なイチゴを出荷できる。農家は通年栽培による生産増に加え、価格上昇期に出荷することで大幅な増収が見込めるといふ。今後5年間に200軒の農家に納入し10億円の売上高を目指す。

苗付近だけ冷却 消費エネを抑制

同社は2008年の設立で、地中熱を利用した住宅や病院向け空調システムを手掛ける。地中や地下水から熱を抽出し、ヒートポンプで分配する技術が強み。イチゴ農家向けにこのシステムに不凍液を詰めたパイプを接続し、冷暖房機能を持た



せた仕組みを開発した。イチゴは通常、夏場に苗を植え、秋から春先にかけて実を付ける。この間に7回ほど収穫できるが、初夏になって気温が上がると実を付けなくなる。このため夏場にはイチゴが品薄となり、市場価格が上昇し、収穫期直前の初秋には5月の5倍近くになるといふ。

イチゴの全国シェアは1割超

(2014年、農水省資料から)

	作付面積(㌃)	出荷量(100㌧)
栃木	603	236
福岡	450	163
熊本	330	111
静岡県	312	104
長崎	274	102
全国	5,570	1,502

そこでイチゴ栽培のビニールハウスに今回のシステムを導入し、苗の近くを通るようにパイプを設置する。夏場には地中に熱を逃がして土壌を地下(セ氏15度程度)より低温に冷やすことで、苗に冬だと錯覚させて結実を促す。冬場は地中熱で暖めて凍結などで枯れることを防ぐ。

導入コストはハウス1棟あたり500万円。苗の付近だけを温度調節できるためハウス全体を冷暖房する場合に比べ消費アグリクラスターは、イチゴ農家に地中熱利用のシステムを売り込む。

トや植え付けの手間を省ながると期待される。効果も期待できる。栃木県は夏から秋にかけて収穫できるイチゴ品種「なつおとめ」を開発するなど、環太平洋経済連携協定(TPP)の発効をにらみイチゴをはじめとする農家の生産性向上を積極支援する姿勢を見せている。アグリクラスターは3月末に栃木銀行から1250万円の融資を受け入れており、後、栃木銀などの紹介などを通じて県内でシステム販売に取り組み。

生産量を従来の1.5倍に増やせるうえ、価格が上昇する夏場から初秋にかけて出荷できるようになり、平均500万円とみられる農家の年収の底上げにつ